

高等学 校

平成 30 年度

教育研究員研究報告書

商 業

東京都教育委員会

目 次

| | | |
|-----|-----------|----|
| I | 研究主題設定の理由 | 1 |
| II | 研究の視点 | 1 |
| III | 研究仮説 | 2 |
| IV | 研究方法 | 2 |
| V | 研究内容 | 3 |
| VI | 研究の成果 | 22 |
| VII | 今後の課題 | 23 |

研究主題

ビジネスを自ら学び主体的かつ協働的に取り組む態度を育むための授業と評価の改善

I 研究主題設定の理由

商業科では、「課題研究」・「総合実践」の科目をとおして、生徒が今まで身に付けた知識及び技術を活用した主体的かつ協働的な学習を実践し、自ら学び主体的かつ協働的に取り組む態度を育んできた。また、平成30年度から「ビジネス基礎」の授業において、東京都独自の教材「東京のビジネス」を活用した、主体的かつ協働的な学習活動を始めている。

他方で、これまで商業科では、検定試験の取得を目指す取組を推進し、知識及び技術の定着を目的とした教授型の授業が重視されてきたため、多くの商業科目において検定試験に向けての知識及び技術を身に付けさせる指導が行われてきた。しかし、新高等学校学習指導要領に求められている生徒同士の討論、産業界関係者などとの対話といった自らの考えを広げ深め、身に付けた知識及び技術を活用し、他者の異なる考え方を取り入れ、グループで意見をまとめる等の学習活動が十分ではない。さらに、評価方法について、学習の最終場面における測定可能な定期考査や検定試験の素点、提出物の評価が中心であり、生徒が主体的かつ協働的に取り組む態度の評価が十分に確立されていない。

これらを踏まえ、主体的及び協働的な学習を通して、社会を生き抜く力を育むとともに、生徒の思考力・判断力・表現力の成長していく過程を可視化し、評価できるようにするため、研究主題を「ビジネスを自ら学び主体的かつ協働的に取り組む態度を育むための授業と評価の改善」とした。

II 研究の視点

1 授業方法の現状

商業科の授業は、検定試験の取得を目指すことを通して得られる知識及び技術を身に付けることに比重を置く教授型の授業が多く、身に付けた知識及び技術を活用することを目的とした授業の取組が十分に行われているとは言えない。今回の、新高等学校学習指導要領の解説においては、自ら学び主体的かつ協働的に取り組む態度を育むためには、「他者との討論により課題の解決策の考案などを行う学習活動、他者の考えに耳を傾け、対立する意見であってもそれを踏まえながら自己の考えを整理し伝える学習活動、地域を学びのフィールドとして、様々な職業や年代の地域住民などとのつながりを持ちながら信頼関係を構築し、協働して課題の解決などに取り組む学習活動、職業資格の取得やコンクールへの挑戦などを通して自ら学ぶ意欲を高める学習活動などが大切である。」と示されている。

2 新しい時代に求められる資質・能力

商業部会では、授業にグループワーク、ペアワークなど、他者との協働的な学習を取り入れることで、生徒はこれまでに学習した知識及び技術を主体的に活用し、生徒は自らの考えを他者に伝え、他者の多様な考えを取り入れることで、意欲的に学習に取り組むことができると考えた。

また、これまでの評価方法についても、定期考査や検定試験の素点、提出物など知識理解の評価が主であり、生徒が主体的かつ協働的に取り組む態度の評価が不十分であった。一人一人の学習に対する取組をルーブリック評価表、他者からの評価等を生徒と教員とが共有することで、生徒自身の学習意欲を更に高めることができると考えた。

これらの授業改善を行うことで、生徒の「思考力、判断力、表現力等」と「学びに向かう力、人間性等」を育むことができると捉え、研究を進めた。

Ⅲ 研究仮説

- 1 他者との協働的な学習を取り入れると、生徒は意欲的に他者と関わりながら身に付けた知識及び技術等を活用することができ、生徒の「思考力、判断力、表現力等」と「学びに向かう力、人間性等」を育むことができる。
- 2 一人一人の学習に対する取組活動をルーブリック評価表、他者からの評価等を生徒と教員とが共有すると、生徒の学習意欲と自己肯定感を高めることができ、生徒は主体的に学習に取り組むことができる。

Ⅳ 研究方法

本部会では、協働的な学習において、ページに示した「主体的かつ協働的に取り組む態度を評価するルーブリック表」を作成した。①は「思考力、判断力、表現力等」を評価する観点、②は「学びに向かう力、人間性等」を評価する観点とした。このルーブリック表を科目の特性に合わせて応用し、授業の冒頭で生徒に示すことにより、目標、ねらい、評価等について教員と生徒とが共有することができる。また、他者の評価等を盛り込んだワークシートを作成し、活用することで、生徒の主体的かつ協働的に取り組む態度を評価することができるかを検証する。

検証授業は、簿記、ビジネス経済、ビジネス基礎（東京のビジネス）の科目で協働的な学習を取り入れた授業を行う。それぞれの科目の特性に合わせて、ルーブリック評価表の①、②のいずれかの観点を重視しながら評価を行い、生徒へのアンケートをもとに結果を検証する。

協働的な学習において主体的かつ協働的に取り組む態度を評価するルーブリック表

| 達成度 身に付けさせたい力 | | レベルA | レベルB 【履修目標】 ¹ | レベルC | レベルD 【到達目標】 ² | レベルE |
|------------------------------------|--|---|---|--------------------------------|-----------------------------------|----------------------------|
| | | ① 学習した知識及び技術を活用する力 | 知識及び技術を活用して、与えられた課題を解決し、更に新たな疑問や課題を発見できる。 | 知識及び技術を活用して、与えられた課題が解決できる。 | 知識及び技術を活用して課題に取り組む姿勢が見られる。 | 与えられた課題に必要な、知識及び技術を習得している。 |
| ② 組織の一員として自己の役割を認識し、他者と積極的に関わる力 | 組織の一員として自己の役割を認識し、他者と積極的に関わることで課題を解決できる。さらに新たな疑問や課題を発見できる。 | 組織の一員として自己の役割を認識し、他者と積極的に関わることで、課題を解決できる。 | 自己の役割を認識しようとし、他者と積極的に関わろうとする姿勢が見られる。 | 自己の役割を認識しているが、他者と積極的に関わろうとしない。 | 自己の役割を認識することができず、他者と積極的に関わろうとしない。 | |

1 履修目標：授業で扱う内容及び、授業のねらいを示す目標

2 到達目標：授業において、生徒が最低限身に付ける内容を示す目標

V 研究内容

1 研究構想図

全体テーマ『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善

高校部会テーマ

「これからの時代に求められる『資質・能力』を育むための授業改善と学習評価の充実」

各教科等における「資質・能力」について

【知識及び技術】

商業の各分野について体系的・系統的に理解し、各分野に関する知識や技術

【思考力、判断力、表現力等】

ビジネスに関する課題を発見し、職業人に求められる倫理観を踏まえ合理的かつ創造的に解決する力

【学びに向かう力、人間性等】

よりよい社会の構築を目指して自ら学び、ビジネスの創造と発展に主体的かつ協働的に取り組む態度

高校部会テーマにおける現状と課題

【現状】

- 1 商業科の授業は、検定試験を取得することを通して得られる知識及び技術を身に付けることに比重を置く教授型の授業や検定対策の授業が多い。
- 2 定期考査や検定試験の素点、提出物など知識理解の評価が主であり、主体的かつ協働的に取り組む態度の評価が不十分である。

【課題】

- 1 生徒は検定試験に向けての知識及び技術を身に付けることができるが、身に付けた知識及び技術を活用した学習活動が不足しているため、思考力、判断力、表現力等の育成が不十分である。
- 2 生徒の主体的かつ協働的に取り組む態度の評価が確立されていない。

【テーマ設定のための着眼点】

- 1 知識及び技術を活用するための協働的な学習の場を設定する。
- 2 生徒の主体的かつ協働的に取り組む態度を評価するルーブリック評価表等を作成する。

高等学校商業部会主題

ビジネスを自ら学び主体的かつ協働的に取り組む態度を育むための授業と評価の改善

仮説

- 1 検定試験の取得に比重を置いてきた商業科の授業においても、他者との協働的な学習を取り入れると、それまでに学習した知識及び技術等を活用することができ、生徒の思考力・判断力・表現力等を育み、生徒が意欲的に学習に取り組むことができる。
- 2 検定試験の取得に比重を置いてきた商業科の授業においても、一人一人の学習に対する取り組みをルーブリック評価表、他者評価（他者からの評価）等で可視化することにより生徒の「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力、人間性等」に関する客観的な評価を生徒と共有することができ、生徒の主体的な学習につなげることができる。

具体的方策

- 1 知識及び技術を習得した授業の後で、協働的な学習を取り入れた授業を行う。
- 2 ルーブリック評価表、他者評価等を盛り込んだワークシートを単元に応じて作成し、その評価表を活用し、生徒の主体的かつ協働的に取り組む態度を評価する。

検証方法

ルーブリック評価表、他者評価、教員による観察及び授業前後のアンケート等の結果から、主体的かつ協働的に取り組む態度の向上を検証する。

2 検証授業

実践事例 I

| | | | | | |
|-----|----|-----|----|----|----|
| 教科名 | 商業 | 科目名 | 簿記 | 学年 | 1年 |
|-----|----|-----|----|----|----|

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 取引の記帳と決算Ⅲ

イ 使用教材 「高校簿記 新訂版」実教出版株式会社

「簿記検定問題集 2級」実教出版株式会社

(2) 単元（題材）の目標

「特殊な商品売買取引」、「特殊な手形取引」の単元に関心を高めるため、座席の隣同士でペアになり、日商3級難問題（青カード問題）と今回の教科書問題（うぐいす色）を2題作る。そして教室を動いて未対戦相手を探し、お互いに問題を出し合い相互採点及び解説をする。得点を競う仕訳対戦カードゲームを行うことにより、生徒の学習意欲を向上させ、深い理解を促進させていく。

(3) 単元の評価規準

| ア 知識・技術 | イ 思考・判断・表現 | ウ 主体的に学習に取り組む態度 |
|---|--|--|
| ①「特殊な商品売買取引」、「特殊な手形取引」の単元について、その取引内容を理解し、それを合理的に記帳する基礎的・基本的な知識を身に付けている。 | ①「特殊な商品売買取引」、「特殊な手形取引」について、どのような点が特殊なのかを考え、判断している。 | ①ペアごとに協働し、与えられた取引の問題を解決しようと努力している。 ②問題の解法に向けた活動に意欲的に参加している。 |

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（3時間扱い）

| 時間 | 学習活動 | 評価の観点 | | | 評価規準 (評価方法など) |
|-------------|--|-------|---|---|---|
| | | ア | イ | ウ | |
| 第1・2時 | <ul style="list-style-type: none"> 未着商品取引 手形の書き換え、不渡手形等の取引の記帳の説明 貸借対照表・損益計算書の問題練習 | ● | ● | ● | <ul style="list-style-type: none"> 「特殊な商品売買取引」、「特殊な手形取引」に関心を高め、その記帳処理の学習を積極的に進めようとしているか。 手形の書き換え、不渡手形等の取引の記帳に関する知識と記帳法を理解したか。 |
| 第3時 (本時) | <ul style="list-style-type: none"> 仕訳対戦カードゲームの説明。ペアになって問題の出し合い対戦は1回。問題を出したチームは×の仕訳への解説をする。 本時のみ40分授業 | ● | ● | ● | <ul style="list-style-type: none"> 《B問題》特殊な商品売買取引の場を想像できるか、お互いに仕訳問題を出し合って、速く正確に解き、間違えたチームには解説する。 説明ができるようにしているか。 それぞれの場面で仕訳処理の技術を積極的に身に付けようとしているか。 |
| 第4時 | <ul style="list-style-type: none"> 貸借対照表・損益計算書の問題練習 仕訳対戦カードゲームによる練習 | ● | ● | ● | <ul style="list-style-type: none"> 貸借対照表・損益計算書の問題練習がしっかり解答できているか。 仕訳対戦問題において協力体制ができているか。また、対戦相手に平易に解説できているか。 |

(5) 本時（全3時間中の1時間目）

ア 本時の目標

ペアワークで、《A問題》＝過去日商3級難問題（青カードセット）、《B問題》＝配付された（うぐいす色カード）に「特殊な商品売買取引」、「特殊な手形取引」の場面を想像し、ペアとして仕訳の取引問題を作成する。その《A問題》《B問題》の仕訳の取引問題でゲーム的な要素を取り入れた仕訳対戦カードゲームを行うことで、仕訳の学習を他の生徒と楽しみ、競い合いながら仕訳問題に主体的・協働的に取り組む態度を育む。

イ 仮説に基づく本時のねらい

- (7) 簿記の授業でこれまで学習した知識・技術に協働的な仕訳対戦カードゲームを取り入れることで、思考力、判断力、表現力等を育む。
- (i) 簿記の授業で、ルーブリック評価表を事前に事前時提示し、仕訳対戦カードゲームを取り入れることで、生徒が主体的に学ぶ姿勢を導き出す。
- (ii) 簿記の授業で、協働的な仕訳対戦カードゲームを導入することで、仕訳学習に積極的に取り組み、主体的・協働的な深い学びを身に付ける。

ウ 本時の展開

| 時間 | 学習内容・学習活動 | 指導上の留意点 | 評価規準・方法 |
|-----|---|--|---|
| 5分 | ・前時の学習内容を確認する。 本時のカード対戦方式の内容を確認する。 | ・カードセット《A問題》＝青、《B問題》＝うぐいす色の2種類のカードを配布 | |
| 30分 | ・「特殊な商品売買取引」、「特殊な手形の書き換え」、「不渡手形等の取引の記帳」を想像する。 ・座席の隣の人同士でペアになる。 ・《A問題》＝過去日商3級難問題（青カードセット）から1問選択する。（約3分） ・《B問題》＝配付された（うぐいす色カード）に取引の内容の理解を深めるため生徒自身が取引の場面を想像しながら仕訳問題を1問作成する。B問題は教科書の指定ページの中から二人で話し合い協働して作問する。（約8分間） ・席を移動して対戦相手を見付け、お互いに《A問題》青仕訳問題カードを交換する。《B問題》うぐいす色問題も同様にお互いに交換する。 ・5分で解いた後、2分で相互採点を行う。 ・相手が解けなかったら、5分で解説をする。勝ちチームはリーグ戦表に記入する。 | ・「特殊な商品売買取引」、「特殊な手形の書き換え」、「不渡手形等の取引の記帳」を想像しながら、パートナーと問題を作成し、《A問題》＝過去の日商3級難問題の選択。《B問題》＝今回の教科書問題。《A問題》《B問題》それぞれの問題の解答に10点満点で、それぞれ得点を傾斜配分する。 ・（例 A＝7点：B＝3点）10点×2人＝合計20点満点 ・集中力を高めさせるために、制限時間を設定し、経過時間を示す。 ・作問作業及び、問題の解説を促すために、机間指導や必要に応じて助言を行う。 ・リーグ戦表に勝者報告を確認する。 勝者○＝3点 引分△＝1点 敗者×＝0点（Jリーグ方式） ・終わったチームは問題集のB/S・P/L問題を解く。 | ・1学期に学習した日商3級問題をチームで協働して選択しているか。 ・「特殊な商品売買取引」、「特殊な手形の書き換え」、「不渡手形等」の場面を想像し、積極的に《B問題》＝「うぐいす色カード」にチームで協働して問題を作成しようとしているか。 ・それぞれの場面で仕訳作問・解答作業を積極的に進めようとしている。積極的に学び合いに参加している。 ・相手が解けなかったら、平易に解説をし、分かりやすく協力して教えようとしているか。 |
| 5分 | ・学習活動の振り返り | ・仕訳問題表にある他者評価・自分のチームの協力体制を記入させる。 | |

(6) 本時の振り返り

本時は、習熟度別クラス編成の発展クラスの授業である。2学期になり、1学期の考查結果に基づいて基礎クラス13人、発展クラス26人×2クラス編成にクラス替えを実施した。そのクラス替えのため初対面の生徒も多く、できるだけ声掛けをしてチーム内で話しやすい環境を作った。

本時の前に3回仕訳対戦カードゲームを実施している。個人の知識・表現力を把握できていないため、あえて出席番号順の隣同士のペアでチーム編成をすることにした。チーム間に学習してきた知識・表現力のばらつきはあったが、各チームが協働して限られた時間の中で与えられた「青カード」の選択、「うぐいす色カード」の作問を行なった。生徒は、チーム間で問題を出す、問題を解く、相互採点する、お互いに解説する、得点を報告する、という能動的な仕訳対戦カードゲームを行うことで、楽しみながら、これまで身に付けた知識の深化を図るとともに主体的に学習に取り組むことができた。

ア 仮説1の検証

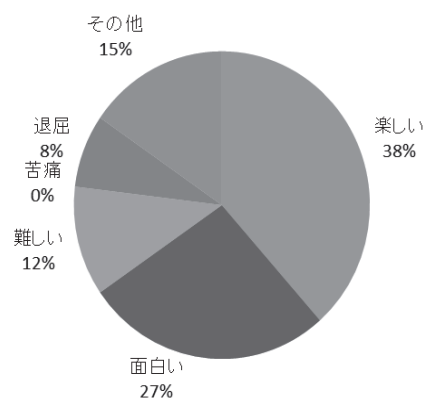
これまで簿記の授業では、資格取得等の取組に向けた、知識及び技術の定着を目的とした教員による教授型の一方通行的授業が重視されてきた。また、身に付けた知識及び技術を活用することを自ら考えようとせず、教員に教えてもらうことを期待する受け身の生徒も少なくなかった。

今回、仕訳対戦カードゲームを実施し、他者との共同学習を取り入れた授業の感想はおおむね良好（図1）であった。また、仕訳について考える時間も90%以上の比率（図3）で増えている。自由記述欄に「自分達で問題を作るのは大変だったけどやりがいを感じた」「〇〇さんに質問すると仕訳の意味がよく分かった」「得点を競い合いJリーグ方式で総当たりするのが楽しかった」「Jリーグ（仕訳対戦）は熱くなる・楽しい」など肯定的な意見も多数あった。一方で「チーム戦で足を引っ張ってしまうので緊張する」「チームで対戦すると時間に追われ焦ってミスをしてしまう」というコメントを残した生徒もいた。1学期に学んだ知識・技術が不十分である生徒も50%以上あり、「青カード」選択場面で、特に「現金科不足」「訂正仕訳」の知識がしっかり定着していないことが確認された。これまでの蓄積した知識にも個人差があることを再認識し、チーム再編成の参考材料にした。パートナーのことを思い緊張し、リーグ戦の対戦結果にこだわり授業に参加する時間が、思考力・判断力表現力等を育むことを実感できた。

イ 仮説2の検証

授業で用いた仕訳解答用紙が（図2）である。共通ルーブリック表から、

対戦カードゲームの感想（図1）



授業で用いた仕訳解答用紙（図2）

()組()番氏名()

| 対戦相手 | さん | さん | 得点 |
|--------------|----|----|----|
| 青カード作成問題 | 得点 | 得点 | 得点 |
| うぐいす色チーム作成問題 | 得点 | 得点 | 得点 |

他者評価・自己評価

- A 対戦相手の作成問題の難易度はどうでしたか。
4. 大変難しい 3. 難しい 2. 標準 1. 簡単
- B 出来なかった問題に対する相手の解説はどうでしたか。
4. 非常にわかりやすい 3. わかりやすい 2. わからない 1. 全く分からない
- C 自分のチームの作問を協力して進められましたか。
4. 積極的に協力・相談して作問した 3. 協力・相談して作問した 2. あまり協力せず作問した 1. 全く協力せず作問した

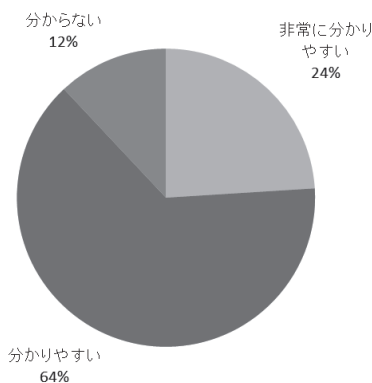
他者と積極的に関わる力をチームのメンバーに評価してもらう評価欄を仕訳解答用紙の中に設けた。問題の難易度の評価を設けながらも、チームで解説ができない問題を提示すると、「知識及び技術を習得していない」低い評価の観点になることも強調した。今回の検証授業では、B 相手チームの解説に関する他者評価(図3)で「分からない」を選んだ生徒が少なくなく、しっかり問題を理解しないまま、勝つことだけを考えて出題したチームが若干見られた。

その一方で、チーム内の学習活動の増加80%以上となり、他者評価を意識して上手に説明をした70%以上(図4)となった。自由記述欄に「相手チームの解説を聞いていて仕訳の内容が分かった」等。他者評価は、チーム内で真剣に話し合う姿を生み出し、チームの協働に関する肯定感を強め、他者と積極的に関わることで、主体的に学習に取り組む意欲や態度が育まれる結果となった。

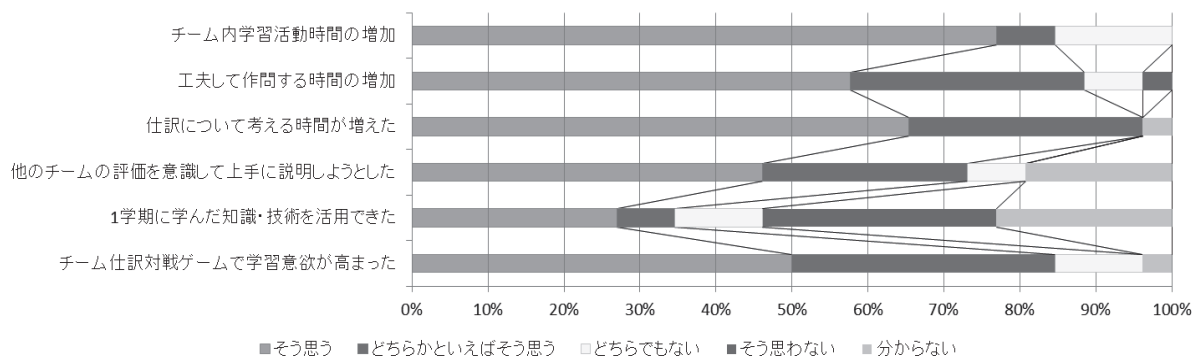
「聴く」を主活動とする講義を受け、自ら記帳練習へと向かう一連の授業も大切である。しかし、今回のアンケートの結果から、仕訳対戦カードゲームは、主体的で協働的な深い学びにつながっていることを実感した。

ウ 課題

対戦相手の説明について(図3)



アンケート結果(図4)



2学期から、簿記の授業にペアワークを取り入れたこの仕訳対戦カードゲームを実施している。2学期にクラス替えがあったため、チームの知識の蓄積や生徒間の人間関係は考慮せずにチーム編成をした。そのため、勝ち点数、得点数にチームによる偏りが見られ、連敗のチームが生じてしまった。しかし、2学期中間考査後は、個人差を再認識し、生徒の正答率と考査の結果を参考にして、チームの再編成を行った。その結果、連敗のチームが少なくなり、20点に近い得点を獲得するチームもあった。

また、チーム数が奇数で、私に対戦相手(持ち点は10点)となったため、対戦中は全体を見て机間指導を行い、必要に応じて助言することができなかった。相方が欠席のチームは、チーム内の協働的な学習ができない時間が生じた。1人チームも他チームとの対戦で他者評価を意識して一生懸命に解説をしている姿が見受けられた。

青色の日商仕訳難問カードは、順次入れ替え更新しているが、入れ替え後、新問題を解きはじめ、ペアで相談し1問の青カード選択に3分以上の時間を掛けるチームが多数見ら

れた。うぐいす色カードの作問も、対戦に勝ちたい意識から、難しい問題を考えるチームが制限時間を守れない場面が見られた。今後は、ページ数を指定して事前に仕訳問題の作問を宿題として準備しておくように方向付けたい。

実践事例Ⅱ

| | | | | | |
|-----|----|-----|----|----|------|
| 教科名 | 商業 | 科目名 | 簿記 | 学年 | 第3学年 |
|-----|----|-----|----|----|------|

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名 全商簿記実務検定試験3級過去問題演習
 イ 使用教材 「簿記新訂版」東京法令出版 自作プリント

(2) 単元（題材）の目標

- (ア) 取引の仕訳に関しては、取引の二面性と仕訳の方法について理解させ、今後の仕訳の問題にも対応できるようにする。
 (イ) 全商簿記実務検定3級の仕訳に習熟させる。
 (ウ) これまでに学習した知識を活用できるグループワークを取り入れ、生徒が主体的に学習に取り組む姿勢を身に付けさせる。

(3) 単元の評価規準

| ア 知識・技術 | イ 思考・判断・表現 | ウ 主体的に学習に取り組む態度 |
|---------------------------------|--|--|
| ①取引の結合関係について理解し、仕訳を適切に行うことができる。 | ①仕訳の意味や基礎的・基本的な知識を身に付け、取引を仕訳することができる。 ②グループワークにおいて、自分の意思を表現する力が身に付いている。 | ①簿記上の取引について関心を持ち、取引要素の結合関係を理解した上で仕訳を行い、自ら進んで調べたり質問したりして身に付けようとしている。 ②グループワークにおいて問題解決に向け積極的に取り組んでいる。 |

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（3時間扱い）

| 時間 | 学習活動 | 評価の観点 | | | 評価規準 (評価方法など) |
|-------------|--|-------|---|---|---|
| | | ア | イ | ウ | |
| 第1時 | ・全商簿記実務検定3級仕訳問題演習 | ● | ● | ● | ・全商簿記実務検定3級仕訳問題を意欲的に取り組んでいる。 |
| 第2時 (本時) | ・全商簿記実務検定3級仕訳問題演習 ・グループワークによる仕訳問題演習 | ● | ● | ● | ・全商簿記実務検定3級仕訳問題をグループワークにより意欲的に取り組み、自分の意思を表現できているか。 ・グループワークにおいて問題解決に向け積極的に取り組んでいる。 |
| 第3時 | ・全商簿記実務検定3級仕訳問題演習 ・前時までの問題演習の振り返り | ● | ● | ● | ・仕訳処理の技術を身に付けている。 |

(5) 本時（全3時間中の2時間目）

- ア 本時の目標

ジグソー法を用いたグループワークを取り入れ、生徒同士で教え合い、仕訳問題に対して主体的かつ協働的に取り組む態度を育む。

イ 仮説に基づく本時のねらい

(ア) 簿記の授業においてこれまでに学習した知識・技術にジグソー法を用いたグループワークを取り入れることで、思考力・判断力・表現力等を育む。

(イ) 簿記の授業においてもルーブリック評価表や他者評価を取り入れることで、生徒が主体的に学ぶ姿勢を導き出す。

ウ 本時の展開

| 時間 | 学習内容・学習活動 | 指導上の留意点 | 評価規準・方法 |
|-----|---|---|--|
| 5分 | <p>本時の目標を把握する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時までの学習内容を確認する。 ・本時のグループワークについて説明をする。 ・ルーブリック評価表の確認 | <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容を明確にし、生徒の学習活動が活発になるように促す。 | <ul style="list-style-type: none"> ・目標と評価について確認し、到達目標を目指して活動しようとしている。 |
| | <p>グループワーク①【5分】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・①②③④の番号ごとに分かれてグループワークを行う。 ・同じ番号同士のグループで共通の仕訳問題を2問解く。 ・終わったグループから挙手をし、答え合わせをする。 ・グループワーク①が終了したら席を移動する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・分からないところは、同じ番号のグループ内で相談する。 ・必要に応じて声掛けを行い、生徒の自主的な活動を促す。 ・机間指導を行い、場合によっては助言を与える。 ・終わったグループから挙手をさせ、答えを確認する。誤答のまま終わらせないようにする。 ・経過時間はICT機器で表示する。 ・解答を教えてもらったら、解答用紙に教えてもらった生徒の名前を記入させ、他者評価につなげる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・相手の意見を聞き、要点を整理しようとしている。 ・自分の役割を確認し積極的にグループワークに参加している。 |
| 25分 | <p>グループワーク②【20分】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ABCのグループに戻りグループワークを行う。 ・グループワーク①で行った仕訳問題a～hまでの問題を解きグループで100点を目指す。 ・グループワーク②が終了したら自己採点を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて声掛けを行い、生徒の自主的な活動を促す。 ・分からないところは、グループ内で質問し、グループワーク(1)で担当した人が代表で教える。 ・解答を直接伝えるのではなく、「なぜ、そうなるのか」という自分の考えを伝えることが重要であることを理解させる。 ・経過時間はICT機器で表示する。 ・解答を教えてもらったら、解答用紙に教えてもらった生徒の名前を記入させ、他者評価につなげる。 ・採点はICT機器で解答を表示し、生徒に行わせる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・相手の意見を整理し、自らの考えを伝えることができる。 ・自分の役割を確認し積極的にグループワークに参加している。 ・分からないところがあれば自分の言葉で解かりやすく解説し教えようとしている。 |

| | | | |
|-----|---|---|--|
| 15分 | <p>小テスト【10分】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小テストが終了したら、自己採点を行う。 <p>・学習活動の振り返り【5分】</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・本時で行った同じ仕訳問題を解く。 ・採点はICT機器で解答を表示し、生徒に行わせる。 ・生徒が正しい自己評価を行い、次への学習へつながるように促す。 ・自己評価が終わったらグループ内で他者評価をしてもらう。 | <ul style="list-style-type: none"> ・本時で学んだ学習を振り返り、小テストに取り組んでいる。 |
|-----|---|---|--|

(6) 本時の振り返り

本授業は定時制商業科3学年14名で行った。本校では2学年から「簿記」の授業が始まり、3学年の生徒が「簿記」を受けるのは2年目である。2年かけて全商簿記検定3級の範囲を学んできた。本時では、全商簿記検定試験対策として仕訳問題のグループワークを行った。1グループ4～5人で三つのグループに分けた。グループ編成は学力のバランスなどを考えて、こちらから指定したものである。

最初にグループワーク①を行った。各グループで右の図のような仕訳問題の担当を決めており、同じ問題担当同士で集まり同じ問題を解いた(a, b問題担当であればa, b問題担当同士が集まってa, b問題を2問解く)。グループワーク②では、元のグループに戻り仕訳問題a～hまでを解いた。ここで分からない問題があれば、その問題担当の生徒がグループワーク①で得た知識を活用してグループ内に共有する。今回のグループワークのポイントの一つとして答えを直接教えるのではなく、「なぜ、そうなるのか」を自分の言葉で説明するということを常に生徒へ呼び掛けた。

グループ分け (図5)

| グループワーク①【5分】 | | | |
|--------------|-------|------------|------------|
| 仕訳問題 | Aグループ | Bグループ | Cグループ |
| a, b | Aさん | Eさん Fさん | Jさん Kさん |
| c, d | Bさん | Gさん | Lさん |
| e, f | Cさん | Hさん | Mさん |
| g, h | Dさん | Iさん | Nさん |

↓

| グループワーク②【20分】 | | | |
|---------------|-------|------------|------------|
| 仕訳問題 | Aグループ | Bグループ | Cグループ |
| a, b | Aさん | Eさん Fさん | Jさん Kさん |
| c, d | Bさん | Gさん | Lさん |
| e, f | Cさん | Hさん | Mさん |
| g, h | Dさん | Iさん | Nさん |

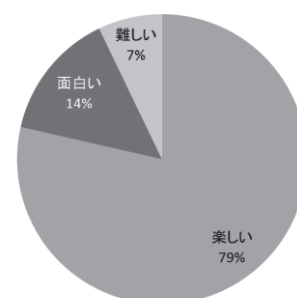
教授型の授業が多かった簿記の授業で、グループワークを取り入れることで、簿記ができる生徒も「なぜ、そうなるのか」という教え方は苦戦していた感じであった。各グループから「なんて説明すればいいだろう」や「人に教えるのは難しい」などの声が上がっていたが、それだけ生徒自身が今まで得た知識を頭の中で振り返り、自分の言葉にしようとする姿が見て取れた。

ア 仮説1の検証

授業実践後にアンケートを行い、生徒の協働的な学習に対する意見を聞いた。今回のグループワークでは、これまでに学んだ知識・技術を活用して解答するだけでなく、グループ内で理解できていない生徒へ説明する役割があったことから、「協働的な学習によって、これまでに学んだ知識・技術を活用できたか」の問いに半数以上の生徒が「できた」と回答した。これまで簿記を苦手としていた生徒も、担当する問題は頭を悩ませながらも説明している姿が印象的であった。

授業の感想については(図6)、約8割の生徒が「楽しい」と回答した。主な理由として「協力して問題を解くのが楽しい」や「人に教えるのが楽しい」などの意見が多く書かれていた。また、「教えるために熟考し、自分の中で確立されていく感じが良かった」や「自分の力で解ける問題が多くなった」などの意見もあり、今回のグループワークを行ったことで、仕訳問題を

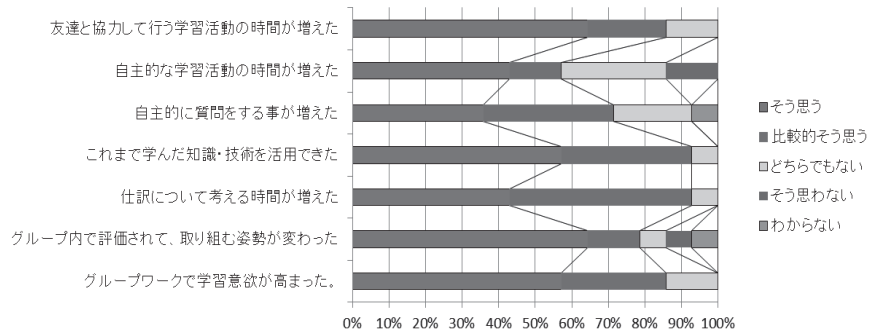
本時の授業への感想 (図6)



解く力や、考える力が身に付いてきていると生徒自身も実感している様子であった。成長を実感できることが「楽しい」と回答する理由の一つだと考える。楽しみながら授業へ取り組める環境が、生徒が意欲的に学習へ取り組む姿勢につながる事が確認できた。

一方で「難しい」と回答した生徒も存在している。しかし、グループワークに対する否定的な意見ではなく、「普段の授業を聞き流していたから教えるのが難しい」と書かれていた。授業で簿記が理解できず、これまでに学んだ知識・技術が不十分である生徒も少なくない。しかし、グループのサポートを受けて積極的に取り組む姿勢が見られ、「この授業はあなたの考える力・仕訳を解く力・説明する力を高めるために役立ったと思いますか？」(図7)という質問に対して6割以上が「とても役に立った」と回答した。「少しずつ仕訳が分かるようになって

アンケート結果 (図7)



きた」、「前よりも仕訳が得意になった」等、前向きな理由が書いてあった。全体的に簿記が苦手な生徒が大半であるが、誰一人として投げ出すことなく意欲的にグループワークに取り組んでいることが確認できた。

今回のグループワークで思考力、判断力、表現力等が育まれ、それを生徒自身が実感でき、意欲的に学習に取り組む様子が見られた。

今回のグループワークで思考力、判断力、表現力等が育まれ、それを生徒自身が実感でき、意欲的に学習に取り組む様子が見られた。

イ 仮説2の検証

本授業ではルーブリック評価表、他者評価等を盛り込んだ振り返りシートを作成して生徒へ配布し、仮説2を検証した。振り返りシート(図8)は2学期中間考査以降から使用している。

振り返りシートでのルーブリックは「知識・技術の活用」と「他者と積極的に関わる力」の二つの項目を用意した。

「知識・技術の活用」では、生徒の自己評価も評価Aの回答が多かった。この理由の一つは、「知識・技術の活用」の文言を今回は「7～8問解いた」ではなく、「7～8問書いた」にしている。これは、「～解いた」では正解でないといけないと生徒も感じてしまい、自信がない問題は記入しなくなる。

振り返りシート (図8)

振り返りシート

○本日の授業の自己評価はA～Dのどこですか？(表の中に○をつけてください)

| 評価 | A | B | C | D |
|-------------|--|---|---|---|
| 身につけさせたい力 | 仕訳問題を、これまで教えてもらった知識を活用して、自分の力で7～8問書いた。 | 仕訳問題を、これまで教えてもらった知識を活用して、自分の力で5～6問書いた。 | 仕訳問題を、これまで教えてもらった知識を活用して、自分の力で3～4問書いた。 | 仕訳問題を、これまで教えてもらった知識を活用して、自分の力で1～2問書いた。 |
| 他者と積極的に関わる力 | グループワークで課題に他の人と協力して取り組んだ。解からない問題をグループ内で質問し、自分の考えを持ち、他の問題にも応用することができた。自分の知っている知識を自分の言葉(考え)でグループ内に伝え、解かったと書ってもらえた。 | グループワークで課題に他の人と協力して取り組んだ。解からない問題をグループ内で質問し、自分の考えを持つことができた。自分の知っている知識を自分の言葉(考え)で伝えることができた。 | グループワークで課題に他の人と協力して取り組んだ。解からない問題をグループ内で質問することができた。自分の知っている知識をグループ内に伝えることができた。 | グループワークで課題に取り組んだ。解からない問題をグループ内で質問することができなかった。自分の知っている知識をグループ内に伝えることができなかった。 |

○本日の授業で自分が頑張った点を3つ書いてください。

○本日のグループワークの中で、一歩助けてくれた人、もしくは頑張って取り組んでいた人は誰ですか？

| | |
|-----|----|
| MVP | さん |
| 理由 | |

3年 B組 番 氏名

特に定時制では、学力に自信がないと感じている生徒は少なくない。「～書いた」という文言にしたことで、自己評価を始めた当初は「自分の力で解答欄を全部埋めた」、「最後まであきらめずに解くことができた」、「自分の力で問題を解いた」という意見が多く、解答欄に記入することで授業に対する一つの達成感を得ることができた様子であった。回数を重ねると「前回間違えた問題を今回は解くことができた」、「前まで解けなかった問題が解けるようになった」という意見が出るようになった。

解答欄に記入することから間違いが発生し、どうして間違えたのかという次の学習につなげることで、同じ間違いをしなくなる生徒が増えてきた様子である。

「他者と積極的に関わる力」に関しては、評価A～Cに分散していた。しかし、評価Dを選択した生徒は一人もいなかった。定時制の生徒には「自分の言葉で相手に説明すること」、「分からない問題を質問すること」の2点は、今までの教授型の授業では勇気のいることである。ループリックで目標が明確になっているから生徒も、「ここまでやってみよう」という様子で活発にグループワークに取り組んでいた。

振り返りシートにはMVP欄を設けて、他者からの評価も行った。簿記の得意な生徒の名前が多く挙がる中で、「最後まであきらめずに自分の力で問題を解いていた」等の理由で簿記に対して苦手意識のある生徒の名前も何名かが挙げられた。自己評価以上に周りから評価されることは、生徒の中でも達成感は大きい様子であった。MVP欄に名前が挙げた生徒は、その後の授業においても意欲的に取り組む様子が見受けられた。

一方で、今回の授業ではグループワークの時間が延びたため、振り返りシートを記入する時間を十分に確保することができなかった。振り返りシートを記入する目的は、授業の取組をしっかりと振り返り、自己評価や他者評価によって自己肯定感を高めて学習に取り組んでもらうためである。予定していた時間が延びても、振り返りシートの記入時間はしっかりと確保するうえで授業を展開できるよう心掛けていきたい。

今回、振り返りシートを使用して自己評価、他者評価を行ったことで、生徒の中でも一つの達成感を得ることができた様子であった。特に定時制の生徒にとって、達成感を得ることは自信にもつながっていく様子が見受けられた。学力に自信のない定時制の生徒にも自己評価、他者評価を可視化し共有することで、主体的かつ協働的な取組につながることを実感することができた。

ウ 課題

今回のグループワークは最初にも記述したように、14名という少人数で行った。クラス替えがないため、生徒の人間関係も良好であり活発にグループワークが行われた。しかし、細かいところに目を配ると、グループの中でも周りの様子を見て積極的に発言する生徒もいれば、質問されるまで発言はしない生徒もいるなど様々である。グループワーク②では全て生徒たちに任せていたが、相手の間違いを指摘して説明する生徒は少なかった。こちらが机間指導をする中で「これで合っているかな？」のような声掛けをグループで行うことで、質問待ちの生徒も少なくなりグループワークがより活発になる。グループワークにおいて教員側がファシリテーターとなり生徒の学習を引き立たせることが大事だということを再確認した。

今回は14人という少人数でのグループワークとなったが、全日制30人規模の場合、全体

に目を配れるかという不安を感じた。昨年度の教育研究員報告書にも課題として挙げられている。簿記は教授型の授業が多いという現状から今回のグループワークを実践して仮説の検証を行った。非常に効果的な結果が得られたことから、人数が多い場合でも活発なグループワークが行われ、同様の結果が得られるように今後も指導方法を検討していく。

実践事例Ⅲ

| | | | | | |
|-----|----|-----|---------------------|----|------|
| 教科名 | 商業 | 科目名 | ビジネス基礎 (東京のビジネス) | 学年 | 1 学年 |
|-----|----|-----|---------------------|----|------|

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 ビジネス基礎 第7章 ビジネスとコミュニケーション
東京のビジネス 第3章 東京の経済

イ 使用教材 「ビジネス基礎」実教出版株式会社 「東京のビジネス」東京都教育庁

(2) 単元（題材）の目標

本校の「東京のビジネス」は、NPO法人と連携して行っており、学生や社会人がメンターとして生徒へ助言や授業の取組状況の確認をしている。ビジネス基礎の授業で学んだコミュニケーションの役割、ビジネスマナーなどの知識を東京のビジネスの授業で活用しながら、コミュニケーションの重要性について理解を深めさせる。また、興味のある企業へのインタビューに向けて、自分の役割をもち、協働的な学習を行うことで主体的に学習に取り組むことができるようにする。

(3) 単元の評価規準

| ア 知識・技術 | イ 思考・判断・表現 | ウ 主体的に学習に取り組む態度 |
|---|--------------------------|---|
| ①コミュニケーションの役割や話し方、聞き方について理解できている。 ②インタビューを行う時に必要な知識や技術を活用し、質問を考えている。 | ①どのような質問が効果的かを考えることができる。 | ①グループ活動の中で役割をもって学習に取り組んでいる。 ②メンターに積極的に質問し、また自分の意見を発言できている。 |

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（3時間扱い）

| 時間 | 学習活動 | 評価の観点 | | | 評価規準 (評価方法など) |
|-------------|---|-------|---|---|---|
| | | ア | イ | ウ | |
| 第1時 | 第7章 ビジネスとコミュニケーション 1. コミュニケーション 1. コミュニケーションの役割 2. コミュニケーションの種類 3. 話し方・聞き方 3. 基本的なビジネスマナー 2. ことばづかい | ● | | ● | <ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションが情報などを伝えるだけでなく、感情や態度も伝えているということが理解できている。 上手な話し方や聞き方のポイントを理解できている。 敬語の使い方について理解できている。 |
| 第2時 (本時) | 東京のビジネス (グループワーク) ・ワークショップ 前時に学習したコミュニケーションの役割や聞き方、話し方についてインタビューを体験して考えさせる。 ・次回の授業で質問をする相手の情報をもとに質問を考える。 | ● | ● | ● | <ul style="list-style-type: none"> ワークショップで効果的な質問について理解できている (What ではなく、How や Why)。 相手の資料を見ながら、効果的な質問を考えることができる。 |

| | | | | |
|-----|---|---|---|---|
| 第3時 | 東京のビジネス（グループワーク） ・前時に作成した質問リストをもとに、インタビューの実践を行う。 ・インタビューの実践を通して、実際の取材に向けて修正をする。 | ● | ● | ・前時に学んだ効果的なインタビューの仕方について実践できている。 ・インタビューの実践を通して、実際の取材をよりよくするためにグループで活発に話し合うことができている。 |
|-----|---|---|---|---|

(5) 本時（全3時間中の2時間目）

ア 本時の目標

インタビューには様々な方法論や理論がある。NPO法人及びオーラルヒストリーを扱う大学の学生と連携しながら、効果的なインタビューの仕方について考え、相手からより深く話を聞くことができる質問を考える。

イ 仮説に基づく本時のねらい

NPO団体や大学生、社会人など、他者との協働的な学習を取り入れることで、生徒が主体的に学習に取り組むことができる。また、メンターを中心とした他者からの評価を基に、生徒の主体的かつ協働的に取り組む態度を評価する。

ウ 本時の展開

| 時間 | 学習内容・学習活動 | 指導上の留意点 | 評価規準・方法 |
|-----|---|---|---|
| 8分 | <ul style="list-style-type: none"> ループリック評価表について説明 イントロダクション&チェックイン 本時の授業の趣旨について説明 インタビューとは何か 慶應義塾大学の学生の簡単なプロフィール（名前、顔写真、興味のあること、将来の夢など）を配布 次回、実践練習を行う相手のプロフィールを踏まえ、キーワードから、何をメインに質問を作るか考えることを説明 | <ul style="list-style-type: none"> 前回の授業時のグループで座るよう指示する。 | |
| 20分 | <ul style="list-style-type: none"> ワークショップ（ペアワーク） 生徒自身がインタビューを体感できるようなワークショップ アイスブレイクの効果 聞き方、話し方 （視線、言葉遣い、座り方など） whatからwhyやhowへ | <ul style="list-style-type: none"> 聞き方や話し方の悪い例から行うことで、効果的なインタビューを実際に体験させ、良い例を学ぶよう説明する。ペアワークを行い、全員がしっかりと体験できるようメンターの方々と連携する。 | <ul style="list-style-type: none"> メンターの方々に生徒一人一人の取組の様子を注意深く観察する。 |
| 10分 | <ul style="list-style-type: none"> 質問を考える（個人） 来週の授業に向けて、配布された清水研究室の学生の簡単なプロフィールを参考に、質問リストを作成 様々な質問の仕方・角度・観点を共有し、徐々に質問の数を増やす | <ul style="list-style-type: none"> 質問リストのシートには書き込みやすいように工夫をする。 メンターと相談しながら、質問を考えさせる。 「あなたが～しているのは何ですか？」ではなく、「どうして～しているのですか？」のように相手の回答が深まるような質問を考えさせる。 | <ul style="list-style-type: none"> 考えた質問をワークシートに記入させる。 机間指導で生徒の取組を観察する。 |

| | | | |
|-----|---|--|---|
| 12分 | <ul style="list-style-type: none"> ・質問を考える（グループ） ・取材相手への質問を記入するワークシートを配布する。（相手に対して2枚配布、1枚は下書き、1枚は清書用） ・取材に行く相手に向けて、グループで質問を考える。まずは、何をメインに質問をするのか、聞きたいテーマを考えさせる。次に、アイスブレイク、質問リストを考えていき、どのような質問が効果的かを考え、シートに記入 ・次回の確認とルーブリック評価表の自己評価の記入 | <ul style="list-style-type: none"> ・本番の取材相手を想定し、グループワークを行う。グループの中で役割を明確にし、スムーズに話し合いができるようにする。 ・作業が進んでいないグループに作業工程を確認させる。 ・清書用シートを来週必ず提出するように指示する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・グループで協力しながら、質問を考えさせる。机間指導をしながら、グループの作業の進捗状況や生徒の取組の様子を観察する。 |
|-----|---|--|---|

(6) 本時の振り返り

本校の東京のビジネスは、NPO法人と連携して、「ビジネス基礎」において10月から全10回、1学年全6クラスの授業で展開している。多くの学生や社会人がメンターとして授業に参加し、生徒への助言や取組状況を確認している。授業内容は以下のとおりである。

| 時間 | 学習活動 | 内 容 |
|-----|-------------------------------|---|
| 1 | 対話 | 座学だけではなく、自分たちで調べたり、外部の人と話をしたりする授業であることを説明する。 |
| 2 | まち歩き (フィールドワーク) | 「東京のビジネス」として探求学習を進めていく。普段の町の姿から新しい町の姿を発見する。案内者をつけて、テーマをもって学習する。 |
| 3 | シブヤリサーチ (調べ学習) | 前回は手足で知った渋谷。今回は「数」で渋谷を調べてみる。数字から新しい渋谷像を探る。意外なビジネス、産業など。 |
| 4 | まとめ・企画作り | これまでのインプットから生徒が個々で考える時間を設ける。自由に「行ってみたいところ、会いたい人」を考えて企画を作る。 |
| 5 | 取材準備① [本時] インタビューの質問を考える | 取材に向けての準備、外部の学生の協力を得ながら、良い質問を作る。 |
| 6 | 取材準備② インタビューワークショップ | インタビューを実践し、本番のインタビューに向けて良いインタビューの仕方を考える。 |
| 7 | ゲスト講師 東京のビジネス×渋谷 | 取材に行けなかった生徒に向けた授業を想定。人を通じて、社会を楽しく知る時間とする。東京のビジネスに載っている分野に沿いながら、渋谷らしいテーマ性のあるゲストに来てもらう。 |
| 8.9 | 発表に向けての報告書作成 | 最終的にはウェブマガジンにも掲載し、自分の企画に対する周囲のリアクション、また周囲に見せられる企画書の作成を目指す。 |
| 10 | まとめ 報告会 | 報告会 |

本時は第5回目の授業となる。これまでの授業はメンターが授業を進行していたが、授業設計や運営を任せるのではなく、協働で進めていくために、今回は教員とメンターの2名で授業を進行した。メンターはインタビューの手法論や視点を伝える説明部分を担当し、教員はタイムマネジメントを行った。役割分担を明確にし、生徒が作業に熱中するあまり指示が通りにくいときに声掛けを行うなど、めりはりのある授業を心掛けた。質問を考えるワークを行った時には、生徒がメンターと相談しながら、協力して作業を進める姿が見られた。その活動の中で、メンターは授業時に良い発言をしたり、グループの中でリーダーシップを発揮してまとめようとしたりする生徒の姿をメモし、授業後にその内容をデータ化している。これらを他者評価として活用したいと考えている。

また、授業の最初にルーブリック評価表を示し、最後には自己評価として記入させたが、最初の導入時点で評価の観点についてきちんと説明することができなかつたため、生徒に伝わりにくい点があった。生徒と評価の観点を共有するという意味でも、きちんと時間を掛け

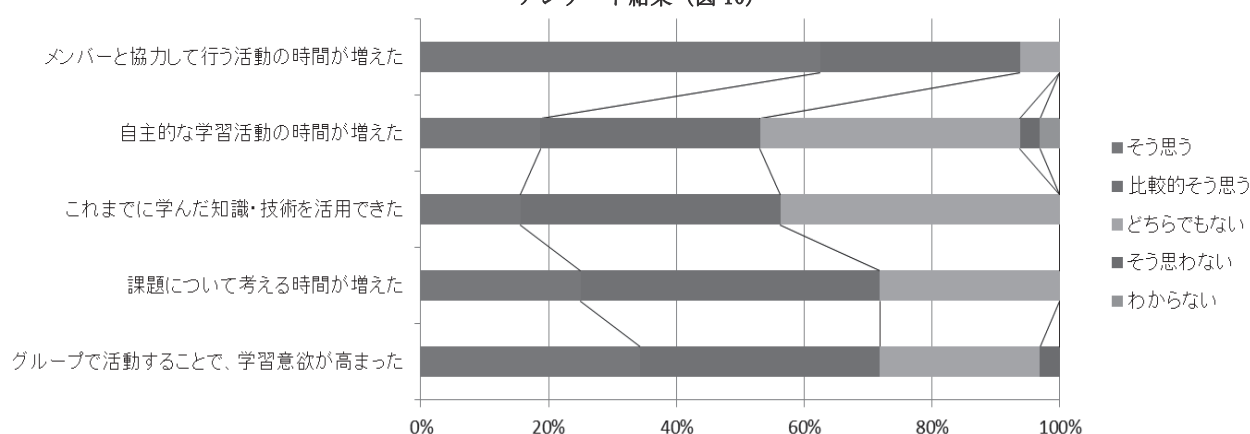
て説明してから授業に入るよう注意すべきであると感じた。

ルーブリック評価表 (図9)

| | A | B | C |
|-------------|---|--|-------------------------------------|
| 主体的に学習する力 | インタビューの基本をもとに、来週のインタビューに向けて、10個以上書くことができた。インタビューにむけて、10個以上書くことができた。 | インタビューの基本をもとに、来週のインタビューに向けて、質問を7つ以上書くことができた。 | 来週のインタビューに向けて、質問を7つ以上記入することができなかった。 |
| 他者と積極的に関わる力 | グループワークで積極的に自分の意見を出し、相手の話をよく聞くことができた。グループの意見をまとめることができた。 | グループワークで自分の意見を出し、相手の話をよく聞くことができた。 | グループワークであまり意見を出すことができなかった。 |

授業後のアンケートの結果をもとに、仮説の検証を以下 (図9) に示す。

アンケート結果 (図10)



ア 仮説1の検証

「グループで学習することで、学習意欲が高まった」には、7割の生徒が肯定的な意見を回答した。また、学んだ知識・技術の活用についても半数以上が肯定的な意見を回答している。授業で学んだことをもとに、グループで協働的な学習を行うことで、協力しながら課題を解決することができるかと生徒が感じていると考える。また、翌週の大学生に対するインタビュー実践後の振り返りでは、「控えめだった自分が人と目を見て話せることに気付き、とても嬉しかったです」「物の見方や考え方を少し変えることで、新しく気付くことが多かった」「考えることが多くなった。これをしたならこうなるなど、一つのことを深く考えるようになった」などの記入が見られ、他者との協働的な学習をとおして、主体的に学習に取り組んでいると感じた。今後も外部と連携した授業を展開することが生徒の成長につながると考えられる。

イ 仮説2の検証

授業に参加したメンターが、授業後にデータ化した評価の一部 (図11) は次のとおりである。(※メンターの名前、生徒の名前はアルファベットで表記している。)

メンター評価表 [一部] (図 11)

| | 生徒 | 生徒の様子を教えてください(1) | | 生徒の様子を教えてください(2) | | 生徒の様子を教えてください(3) |
|-------|----|----------------------------------|---|------------------------------|---|--|
| メンターA | A | 楽しそうだったけど、席の配置的に少し外れてしまっていた。 | G | 積極的に授業に関わる姿勢があった。 | M | 授業後に上手く片付けをサポートしてくれた。 |
| メンターB | D | インタビューの進行をハキハキやってくれていてとてもよかったです。 | J | 感想の共有を率先して行ってきて、とても積極的だと思った。 | I | 写真部という、自分の特技を生かして素敵な写真を一生懸命撮ってくれていました。 |
| メンターC | E | 積極的な姿で、みんなを引っ張っていた | K | 質問を楽しんでいた | J | 大勝利と振り返りに書いていたことが、印象的 |

生徒の特長を示すコメントも見られるが、「積極的な姿でみんなを引っ張っていた」というリーダーシップを発揮した姿を示すコメントや、「インタビューの進行をハキハキやってくれていた」という与えられた役割を果たしている姿を示すコメントがあり、これらを他者評価として拾い上げていくことで、主体的かつ協働的に学習に取り組んでいる姿を評価できると考える。

ウ 課題

平成 29 年 2 月に示された商業教育検討委員会報告書によると、これからの商業高校の目指す姿は、「様々な授業の場面で企業等と連携し、生徒がビジネスの諸活動に必要な知識や技術を主体的、かつ、意欲的に学習することができる学校」と記されている。NPO 法人等との連携は生徒にとって様々なことを学ぶ場を提供してもらい、生徒自身が成長できる場となっていると考える。連携 NPO 法人の目指す「高校生の“やりたい”を尊重し、アクションすることで自己肯定感や意欲・好奇心を育む」という活動と、商業高校の目指す「ビジネスに必要な知識や技術を活かしながら主体的かつ意欲的に学習する」ということがリンクするように打合せを何度も重ねながら授業を行ってきた。授業は通常的时间割どおりに、火曜に 3 クラス、木曜に 3 クラスが行っているが、木曜においては 3 クラス同時に行うため、3 クラス分のメンターが必要になる。人員の配置や授業案の作成など、NPO 法人の方々は授業の直前まで調整を行っており、授業の内容について十分に話し合う時間が確保できていない現状がある。今後も外部と連携した授業が増えていくことが予想される中、生徒の普段の状況を把握する教員のファシリテーターとしての役割が求められる。年度当初はもちろんであるが、事前の打合せや事後の振り返りでお互いが情報を共有し、より良い授業に向けて調整していくことが必要であると考えられる。

また、評価方法についても課題が残った。東京のビジネスは定期試験などで点数化することが難しい科目であるため、ルーブリック評価表を最初の授業で示し、授業の観点などについて生徒と共有する予定であった。しかし、教員間での調整に時間が掛かり、全クラスで実施することができなかった。ルーブリック評価表の活用をどのように広めていくかについては引き続き検討していきたい。また、他者評価については、メンターがグループワークなどでの生徒の様子を細かく記入し、データ化することができた。このデータを評価規準に照らして評価できるよう、評価方法を確立し、生徒の主体的かつ協働的な学習の取組を評価していきたいと考えている。今後は評価方法の確立に向けて他の教員と協力しながら検討していきたい。

実践事例Ⅳ

| | | | | | |
|-----|----|-----|--------|----|----|
| 教科名 | 商業 | 科目名 | ビジネス経済 | 学年 | 2年 |
|-----|----|-----|--------|----|----|

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 GDP（国内総生産）

イ 使用教材 「ビジネス経済」 実教出版株式会社 「東京のビジネス」 東京都教育庁

(2) 単元（題材）の目標

ア 日本のGDPについて概観させ、東京都のGDP（都内総生産）と比較し、「都心・副都心、城東、城南、城西、城北、郡部」の各エリアの特徴、主な産業について理解させる。

イ GDPがその期間中に生み出された最終生産物の生産額に相当することを活用し、前述の各エリアで取り上げる主産業の中から企業又は業態を選択し、それらの最終生産額を調査、研究させることで東京都のGDPへの理解を深めさせる。

ウ 協働的な学習の中で自分の役割をもたせ、それを自己評価及び、他者評価による相互評価を行い、評価されることにより自己肯定感を高め、主体的に学びに向かうことができるようにする。

(3) 単元の評価規準

| ア 知識・技術 | イ 思考・判断・表現 | ウ 主体的に学習に取り組む態度 |
|--|--|---|
| ①GDPはその期間中に生み出された最終生産物の生産額に相当することが理解できている。 ②既習の知識を活用し、諸資料から、必要な情報を得ることができる。 | ①東京都で作り出される財・サービスを適切に理解し、分類、整理できる。 ②必要な情報をプリント等にまとめることができる。 | ①グループ活動の中で役割を持ち学習に取り組める。 ②発表者の話をきちんと聞き、相互評価ができる。 |

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（5時間扱い）

| 時間 | 学習活動 | 評価の観点 | | | 評価規準 (評価方法など) |
|-------|--|-------|---|---|--|
| | | ア | イ | ウ | |
| 第1・2時 | ・GDPについての学習 | ● | ● | | ① DPを理解しプリントにまとめられる。 (個人のワークシート(以下、「WS」という。)により自己評価、他者評価、教員評価を行う。) |
| 第3時 | ・東京の経済活動に関する学習 ・6グループで一つのテーマを取り上げ、GDPに関連するデータをグループで調査する。 「都心部」卸売業者、「城東」観光名所、「城南」物流、「城西」アニメ、「城北」工業、「郡部」農業 | ● | ● | ● | ①副教材の内容を理解し、まとめられる。 (WSによる自己評価、他者評価、教員評価) ②インターネットを活用し、必要な情報を適切に検索できる。 (机間指導、WSの回収) |

| | | | | |
|-------------|--|---|---|--|
| 第4時 (本時) | <ul style="list-style-type: none"> 前時の調査の続き 調査項目の一例 何を作っているのか (又はどんなサービスなのか。) 写真、売り上げ、 同業他社との比較、 個人的なエピソード、 アピールポイントは、 グループの意見、工夫した点等 調査した内容をプレゼンテーショ ンソフトにまとめる。 (フォーマットは用意する。) 発表者は発表練習する | | ● | <ul style="list-style-type: none"> ①グループ内で役割分担ができ、自分のやるべき活動を主体的に行える。 (机間指導) ②必要な項目がプレゼンテーションソフト上に再現できている。 (データの提出) |
| 第5時 | <ul style="list-style-type: none"> グループで順に発表させる。 自チームを含め、全てのグループの発表を4段階で評価する。 全グループ発表終了後、自グループの振り返り、他チームの参考になった点を共有する。 | ● | ● | <ul style="list-style-type: none"> ②発表を聴く態勢ができている。 (机間指導及び、発表評価用のルーブリックWSに記入させ、回収) ①GDPを生み出している産業を理解できている。 (WSの回収) |

(5) 本時（全5時間中の4時間目）

ア 本時の目標

東京都で作り出されている財・サービス及びそれらを提供している産業を調査し、東京都のGDPについて理解する。

イ 仮説に基づく本時のねらい

グループ学習の中で、役割分担をすることで責任感が生まれ、その活動内容を他人に評価してもらうことで主体的に学びに向かう意欲が高まる。

ウ 本時の展開

| 時間 | 学習内容・学習活動 | 指導上の留意点 | 評価規準・方法 |
|-----|--|--|---|
| 5分 | <ul style="list-style-type: none"> 挨拶 タイムテーブル、目標の共有 (2分) 前時の振り返り (3分) | <ul style="list-style-type: none"> 本時の見通しを立たせる。 本時の目標を確認、共有する。 前時で決定したグループの発表内容(発表テーマ)を再確認させる。 | |
| 35分 | <ul style="list-style-type: none"> サンプル提示 (大阪のGDP) (5分) 資料調査 (データ収集～分析) (20分) 発表資料作成 (上記と並行作業で+10分) 自己評価 (生徒の状況による。) | <ul style="list-style-type: none"> 調査する項目、発表方法等がイメージできるように見本を示す。 自分の役割を再確認させる声掛けを行う。 データの収集に手間取っているグループへヒントを与える。 ICTパソコンの操作方法が分からない生徒に個別指導する。 プレゼンテーションソフトの使い方の指導 自分の役割が終わり、手が空いている生徒が出始めたら、振り返りシート(Ws裏面)に自己評価させるよう指示する。 | <ul style="list-style-type: none"> 必要な情報を収集でき、プリントに記入できている。 (イ②観察) 役割に応じた活動ができている。 (ウ①WS) |

| | | | |
|-----|---|--|--|
| 10分 | <ul style="list-style-type: none"> ・本時の振り返り、他者評価 (5分) ・発表準備、発表順番の確認 ・次回発表に向けての注意 ・本時のまとめ (5分) | <ul style="list-style-type: none"> ・自己評価が終わったら、グループ内のメンバーに他者評価をしてもらうよう指示する。 ・完成したデータをパソコン上に保存、提出させる。 ・発表者の評価は次回の授業で行うことを伝える。 ・目標を再認識させる。 (1) 東京の経済活動(産業)について、クラスメイトが理解できるような発表資料を作成する。 (2) グループ活動で役割を持って協力して活動する。 ・WSは授業後に回収する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・役割に応じた活動ができている。(ウ①WS) ・必要な情報をプレゼンテーションソフトでまとめることができている。(イ②提出データ) |
|-----|---|--|--|

(6) 本時の振り返り

本授業は選択授業である。1学期には名簿順で、1グループ4～5人で六つのグループで活動を行ったが、2学期に入ってから気心の知れたメンバー同士である程度自由にグループを作成させた。今回は1グループ2～6人で6グループに分かれている。冒頭10分は教室型(対面型)で指導し、その後グループごとに作業を行った。二人1台の割合でパソコンを用意し、作業中はBGMをかけ、グループ内で話しやすい環境を作った。本時(第4時)だけで発表用データを完成させることができず、第5時の前半20分も発表準備を行い、その後、発表～共有・振り返りを行った。選んだテーマとメンバーのモチベーション等の差により、完成データのクオリティにばらつきはあったものの、全グループが限られた時間の中で与えられた課題についてまとめ、発表ができていた。グラフを取り込んだグループの発表では「視覚的に分かりやすい」というコメントがあった一方、「グラフの読み取り方が分からない」というコメントを残した生徒もおり、それまでに学習してきた知識にも個人差があることを再認識した。

授業で用いたルーブリック評価表を含む振り返りシートが右図(図13)である。今回私たちが作成した協働的な学習において主体的かつ協働的に取り組む態度を評価するルーブリック表から、組織の一員として自己の役割を認識し、他者と積極的に関わる力を「関心・態度」として、生徒の資質に合わせて4段階に作り直した。

自己の活動を自ら振り返る記述欄のほかに、他者評価を可視化することを意図してグループのメンバーに評価してもらうコメント欄を設けた。

振り返りシート (図 13)

東京のGDP 振り返りシート

1. 今回の課題をあなた自身で振り返りましょう。
担当した仕事は・・・

頑張った点を3つ挙げてください。

自己評価はA～Dのどこですか？(表の中にOをつけてください)

| 身に付けたい力 | レベルA | レベルB | レベルC (到達目標) | レベルD |
|---------|------------------------------------|---------------------------------------|--------------------|-------------------------|
| 関心・態度 | レベルBに加え、メンバーに「ありがとう」と言われるような活躍をした。 | 役割に応じて、やるべきことを自分で見つけることができ、チームに貢献できた。 | 役割分担に応じて、自分の仕事ができ、 | チームの課題は理解して、参加する意欲を示した。 |

2. あなた自身をメンバーに評価してもらいましょう。
(評価した人： _____)

良かった点を3つ挙げてください。

3. 今回の課題であなたを(チームを)一番助けてくれた人は誰ですか？

| | | |
|--------|----|--------|
| 今回のMVP | さん | その理由は… |
|--------|----|--------|

今回の検証授業における自己評価ではレベルCを選んだ生徒が多く、全体的な傾向として自己評価が低かった。その一方で、他者評価はグループの中での他者の貢献について、手伝ってくれたことがたくさん書かれており、それを生徒が読むことで自己肯定感を高める効果があると期待していた。

授業後のアンケート結果は（図 14）のとおりであり、結果の説明とともに仮説に対する検証も併せて行う。

ア 仮説 1 の検証

知識及び技術等の活用は半数が、「できた・比較的できた」と回答。プレゼンテーションソフトの操作方法に長

けている生徒は、その得意な分野でグループに貢献している姿があった一方、調査を担当した一部の生徒では、具体的に何をどう調べれば良いのか既存の知識をうまく引き出せていない場面も見られた。設問の工夫や机間指導中の資料提示、声掛けが重要だと感じた。

また、本時の授業への感想（図 15）として難しいという意見が多かったものの、同時に「グループのメンバーと話し合える」、「他人の意見が聞けるから楽しい」、「グループの発表では個性が出ていて面白い」という意見もあった。難しい課題であっても投げ出さず、グループ内で決められた役割に対して責任感をもち、楽しく思考、判断しながら課題に取り組んでいることが確認できた。

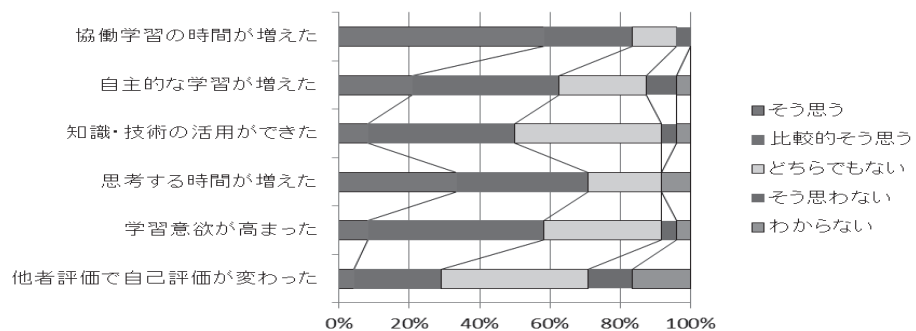
少数意見ではあるが、グループ学習を退屈と評価する生徒もいた。その理由として、一人で学習したい、先生が説明する授業が良いという意見だった。グループ活動に積極的でない生徒は、これまでも一定数存在していた。知識・理解に課題がある訳ではなく、むしろ定期考査の点数だけを見れば成績優良者であることが多かった。今回の研究テーマである「これからの時代に求められる資質」の一つと考えられる「協働的に取り組む態度」を彼らの中にどう育てていくかが、これからのグループ学習の検討事項の一つと考える。

イ 仮説 2 の検証

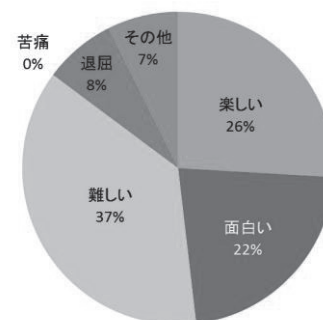
本クラスの授業は4月当初から毎回ルーブリック評価を行っており、教員と生徒との間で評価基準は共有できている。授業ではグループメンバーからの他者評価が主体的な学習にどう影響を与えるのかを検証した。

振り返りシートにおいて、自己評価はレベルC（到達目標レベル）の回答が多かった。設定した課題が難しく、満足な学習ができなかったようだが、一方他者評価は「〇〇を調べ

アンケート結果（図 14）



本時の授業への感想（図 15）



てくれた」、「発表準備の手伝いをしてくれた」等、肯定的な評価が高かった。

授業後のアンケート回答時に、肯定的な他者評価に触れ、自己評価を高く採点してもよい（自己肯定感を高く持ってほしい）旨を伝えたが、意見が変わったのは30%程度にとどまった。評価の共有が

主体的な学習に
結び付いたかに
関しては、80%超

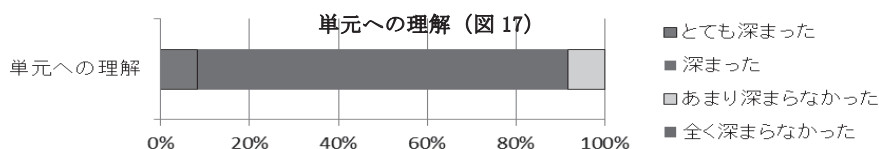
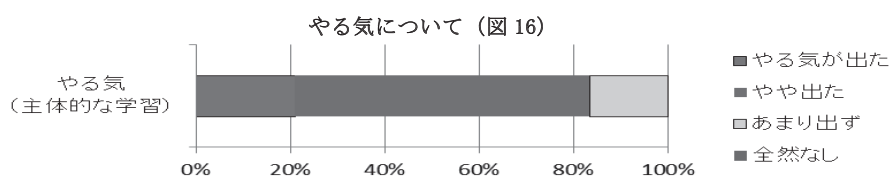
が肯定的な回答だった（図16）。

自由記述には「自分以外に評価してもらうことで、気付かなかったことにも気付けた」、「取り組んだ課題が難しすぎるので、身近なテーマ（税金）で発表をやりたい」という前向きな意見もあり、効果が確認できた。

ウ 課題（単元の理解：グループ学習により知識は定着したのか）

「グループ学
習は楽しい」とい
う声と連動する
形で、単元への理
解も90%超で「深

まった」と回答があった（図17）。楽しく授業は受けられたが、きちんと知識が定着しているかは即断できないので、定期考査、検定試験を通じて検証を継続していく。



VI 研究の成果

本年度の商業部会では、仮説1及び仮説2を検証するために授業実践を行った。他者との協働的な学習を取り入れると、それまでに学習した知識及び技術等を活用することができ、生徒の「思考力・判断力・表現力等」を育み、生徒が意欲的に学習に取り組むことができるとして、検証授業を進めてきた。

仮説1の検証授業では、検定試験の取得に比重を置いてきた商業科の授業においても、協働的な学習を積極的に取り入れ、思考力・判断力・表現力等を高めるための工夫による授業改善を進めることができた。検証授業では、他者に分かりやすいように工夫して説明する様子が見られた。「グループで学習することで、学習意欲が高まった」「グループワークを行ったことで、自分の力で解ける問題が多くなった」など肯定的な意見を回答する生徒が多かった。また、それぞれの学校の現状や科目の特性に合わせて、協働的な意見交換やグループワーク、ペアワークを効果的に組み合わせることで、生徒が教え方を考えたり、なぜそのようになるのかを考えたりなど主体的に学ぶ姿勢を導き出し、学習単元を積極的に取り組む意欲や態度が育まれる結果となった。

仮説2の検証授業では、28年度の商業部会が提案した「共通のルーブリック評価表」に加え、IV 研究方法にある、「学習した知識及び技術を活用する力」「組織の一員として自己の役割を認識し、他者と積極的に関わる力」の観点を新たに加え、それぞれの授業に合った形に変えて生徒に提示した。検定試験の取得に比重を置いてきた商業科の授業においても、一人一人の学

習に対する取組を他者評価等で可視化することにより生徒の「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力、人間性等」に関する客観的な評価を生徒と共有することができ、生徒の学習意欲を引き出し、主体的な学習につなげることができた。生徒の声からも、他者評価を意識して上手に説明するように心掛けたり、控えめだった生徒がリーダーシップを発揮したりなど、他者評価を生徒と共有することで、活発な討論を展開し、一生懸命に問題を解説している姿が見られた。他者評価はチーム内で真剣に話し合う姿を生み出し、チームの協働に関する肯定感を強め、意欲的、主体的な学習活動につながることを確認できた。また、チームの一員として自己の役割を認識し、他者と積極的に関わることができ、課題を解決できる内発的動機付けのステップを一段上っていることが検証された。さらに、MVP欄に名前が挙がった生徒が、その後の授業でも意欲的に取り組む様子が見られた。

これらのことから、協働的で活動的な学習を取り入れ、他者評価等によって取組に対する評価を可視化することで、生徒の「思考力・判断力・表現力等」を育むとともに意欲的に学習に取り組ませることが検証できた。

Ⅶ 今後の課題

協働的な学習とその評価の可視化、共有について4名で検証を進めてきた。「協働的な学習」と「評価の可視化」について、それぞれ3点ずつ課題を挙げ、次年度以降への引継ぎ事項としたい。

協働的な学習については(1)「協働的な学習の場の構築」、(2)「年間授業計画の中で効果的な単元の洗い出し」、(3)「チームで活動する力」を身に付けさせる」の3点が課題としてあげられる。

(1) 協働的な学習をする場の構築

1学期は教員も生徒と初対面で、生徒同士も人間関係が構築できていない中で、アイスブレイクや話し合いやすい雰囲気作りが必要とされるケースが多かった。一方では話し合いに夢中になると、次の作業に移る際の教員からの指示が届きにくくなることもあり、ファシリテーターとしてのスキルや授業規律が求められていると感じた。

(2) 年間授業計画の中で効果的な単元の洗い出し

主体的・対話的で深い学びの学習においては、今までの授業時間とは別に新たに時間を確保しなければならないものではなく、現在既に行われているこれらの活動を「主体的・対話的で深い学び」の視点で改善し、単元の中で指導内容を関連付けつつ、質を高める工夫が求められる。そこで、引き続き、今後の商業科目で求められる「ビジネスを実地で学ぶ」ためにはどの単元の中で実現していくかを検証していく必要がある。

(3) 「チームで活動する力」を身に付けさせる

本研究では協働的な学習を積極的に進めてきたが、協働的な学習に積極的でない生徒も散見されている。このような生徒に「チームで活動する力」を身に付けさせることが、重要であり、協働的な学習の必要性を感じた。また、特別な支援を必要とする生徒には、担任や教育相談委員等と連携して、生徒一人一人を把握し、できることを協働的な学習の中に組み込み、それを適

切に評価することも求められる。

評価の可視化についての課題は、(1)「ルーブリック評価表を作成する難しさ、及び他の教員（含む外部ブレン）との共有・調整」(2)「評価時間の確保」(3)「他者評価で好評価を得ても、自己肯定感が低い生徒への対応」の3点が挙げられる。

(1) ルーブリック評価表を作成する難しさ及び他の教員（含む外部ブレン）との共有・調整

「商業科目におけるアクティブ・ラーニングの視点に基づいた授業で活用する共通のルーブリック評価表」（※平成28年度教育研究員研究報告書・商業）が、今回の研究の土台になっている。これをもとに今年度、「学習した知識及び技術を活用する力」、「組織の一員として自己の役割を認識し、他者と積極的に関わる力」の二つについて共通のルーブリック評価表を作成、さらにこれらを用いて各個人が授業、生徒に合わせてルーブリック評価表を作成、使用した。評価を生徒と共有するためには、その授業で身に付けさせたい力を適切にルーブリック評価表に落とし込まなければいけないが、生徒にも理解しやすい平易な文言を段階ごとに紡ぎ出す作業は慣れが必要だと感じた。検証授業の一回だけでなく、継続的な取組が課題と言えるだろう。評価は成績を付ける際に、他教員との共有が必要不可欠である。また、評価はNPOや企業等の協力団体とも共有し、授業内容に合わせたルーブリック評価表を作る連携も忘れてはならない。協力団体との相談、情報共有は、今回特にスケジュール調整に時間が必要だった。年度当初の年間指導計画を立案する際に評価項目を共有できるのが理想であり、来年度以降は実践していきたい。

(2) 評価時間の確保

自己評価及び他者評価をする時間を確保することも評価の可視化には欠かせないポイントだと感じた。他者評価が自己肯定感につながり、学びに向かう力につながることを考えると、ここをおろそかにしないことが一番重要なのではないかと検証授業で感じるところがあった。授業が計画通りに進まないことは多々あることだが、十分な評価時間を確保する工夫が必要である。授業の最後にまとめの時間を設定することで授業の内容を振り返り、知識を整理することができる効果も期待できる。

(3) 他者評価で好評価を得ても、自己肯定感が低い生徒への対応

最後に自己肯定感が低い生徒が少なくないことも見受けられた。研究主題である「自ら学び主体的かつ協働的に取り組む態度」は生徒の内発的動機付けが高まることが欠かせない。他者評価の際にできていないところを否定するのではなく、できているところを評価するよう生徒にも指示をした。良い評価をされても、活動への評価が変わらない生徒も一定数おり、継続的に肯定的な声掛けを続けていくことで、少しずつ自己肯定感が高まることを期待したい。

今回、様々な取組を検証してきた。効果は一朝一夕には現れないので、一年を通じて生徒の変容・上達を教員と生徒が実感できるような授業改善をこれからも続けていきたい。

平成 30 年度 教育研究員名簿

高等学校・商業

| 学 校 名 | 職 名 | 氏 名 |
|--------------|------|----------|
| 東京都立葛飾商業高等学校 | 教 諭 | 石 井 佑 幸 |
| 東京都立芝商業高等学校 | 主幹教諭 | ◎又 川 康 則 |
| 東京都立第一商業高等学校 | 主任教諭 | 本 多 潤 子 |
| 東京都立赤羽商業高等学校 | 教 諭 | 林 敏 昭 |

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 佐竹 晶博

平成 30 年度

教育研究員研究報告書
高等学校・商業

東京都教育委員会印刷物登録
平成 30 年度 第 135 号

平成 31 年 3 月 発行

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 康印刷株式会社